エド・ブリンズの世界／1967年—72年 (1)

髙　見　恭　子

(1)

1965年，エド・ブリンズ（Ed Bullins, 1936-）が志を同じくする黒人作家たちと共に設立した演劇集団，The Black House は，演劇を政治闘争のプロパガンダと見做すようになっていった Black Panther Party との思想的な対立によって短命に終わった。多くの未発表の作品を抱え，することをなくしていたブリンズは，1967年，彼の作品を読んだ若い黒人演出家，ロバート・マクベス（Robert Macbeth）の招きを受け，カリフォルニアを去りニューヨークのハーレムへ向かった。

マクベスは1960年代の初めからハーレムにコミュニティーをベースにした演劇集団を設立しようと奮闘していた。そして，ついに彼は1967年，ハーレムのサウス街132丁目に本拠地を置くニュー・ラファイエット・シアター（New Lafayette Theatre，以後ＮＬＴとする）を結成する。この演劇集団は1972年に資金不足のため解散を余儀無くされるのだが，閉じられるまでの５年間，当時の黒人演劇運動の起動力となる多くの作品を精力的に上演していった。ブリンズは最初はこの劇団の在住作家として，後には副演出家として，ＮＬＴの中心的存在となっていき，この劇団が終焉を迎えるまでそこに止まった。彼が戯曲家としての地位を不動のものとしたのはまさにこの時代であり，後に彼の代表作と称されるようになった多くの作品を発表していった。

ＮＬＴ制作による最初の作品は Ron Milner の *Who's Got His Own* で，1967

年10月13日にオープンした。第二作はそれより１ヵ月後，Athol Fugard の *Blood Knot* であった。この２つの作品はいずれも先に示したハーレムの本拠地で上演された。だが，1968年にＮＬＴは火事にあい劇場を焼失してしまう。そのためＮＬＴは以後の活動場所を黒人コミュニティーから離れたダウンタウンへと移すことになる。ＮＬＴ制作の第三作は *The Electronic Nigger and Others* で，それらはブリンズの三つの戯曲，*The Electronic Nigger* (1968)，*A Son, Come Home* (1968)，*Clara's Ole Man* (1965) からなっていた。これらの作品はまず，オフ・ブロードウェイの the American Theatre で1968年３月６日から16日にかけて上演され，続いて1968年３月28日から５月26日まで，より多くの観客が入るようにと題名を *Three Plays by Ed Bullins* と変え，the Martinique Theatre で再演された。その後も公演は続行し，トータルで公演回数は86回を数えた。いずれも演出はロバート・マクベスで，演じたのはＮＬＴの劇団員であった。この公演の成功により，ブリンズは1968年の the Vernon Rice Drama Desk Award を受賞した[1)]。戯曲家として，彼はニューヨークの観客（白人層）に知られる存在になったのだが，そのきっかけとなったのは，ＮＬＴが黒人コミュニティーを離れることを余儀無くされたことと無関係ではないことを考えると皮肉である。

以後，ＮＬＴの活動とブリンズの関わりあいを軸に彼の作品を考案していく予定であるが，本論においては，上に述べたＮＬＴ制作の彼の最初の作品のうち *The Electronic Nigger* と *A Son, Come Home* を取り上げることとする。*Clara's Ole Man* はすでに触れたので割愛する。

(2)

The Electronic Nigger は悲喜劇（A Tragi-Commedy）という副題の付けられた一幕劇で，舞台は南カリフォルニアのとある大学の夜の "creative writing" の教室である。季節は秋で，新学期の最初の講義が始まろうとしており，学生たちが燦々午後教室に集まって来る。夜間のコースである故か，学生たち

は年齢，性別，そして人種も様々である。そして，教室の机は「学生同士が向かい合って座る」タイプのもので，「講師は学生が振り向くか，自分の机を離れ学生の中に入っていくかしないかぎり，学生と目を合わせることができない」ように置かれている。この奇妙な配置は，この芝居が対立と不協和音の世界であることを暗示している。主要人物はこの講義の担当者，Mr. Jones（黒人）と学生の一人，Mr. Carpentier（黒人）である。対立と不協和音は後者の人物によって引き起こされていく。

Jones は30才の肌の色の薄い黒人の作家で，「自制心を無くしたときは省略形で話すが，最初から，非常に自意識の強い」人物である。彼の口調は「黒人とはこんなふうな喋り方をするものだとされる一般的な概念」に似つかわしくなく，「多くの“文化的な”もしくは高等教育を受けたニグロに見られる誤ったアクセント」は見うけられない。彼はアイヴィーリーグやカリフォルニア大学のような大学の出らしく，それは「これみよがしに付けているアスコット」に象徴されている。Carpentier は彼とは対照的な人物で，30代後半の大柄な膚の色の濃い黒人である。彼は「どなりちらして演説するように話し，何度も単語を誤って発音する。彼の声は非常に大きく，彼のアクセントは途方もなく滑稽である」。

やがて，Jones による“creative writing”のごく普通のオリエンテーションが始まるが，遅刻してきた Carpentier は彼の話を遮ったり，彼の言葉の揚足を取ったりして悉く講義を妨害し，次第にその教室を支配していく。彼の武器は人の発言を押さえ込む大きな声と巧みなレトリックである。彼はその武器をいかんなく発揮し自己主張することで，学生たちの注意を自分に引きつける。彼は「電話の盗聴者（wiretapper)」で，刑務所で隠しマイクを付けるのが仕事であるが，彼の語彙を用いると彼の職業は以下のような表現になる。

Mr. Carpentier

A. T. Carpentier is the name ... notice the silent T ... My profession gets in the way of art, in the strict aesthetic sense, you know ... I'm a Sociological

Data Research Analysis Technician Expert. Yes, penalology is my field, ...naturally, and I have been in over thirty-three penal institutions across the country ... in a professional capacity, obviously ... ha ho ho. [2)]

彼はその仕事で入手した資料を分析し研究することで，「新しい芸術様式を再創造」しようとしている。一人の学生が提示した物語のアイデアに対し，彼は即座にそれは我々が日常的に見聞きしている孤独，離間，疎外を証明するものであるとして自分の領域に取り込み，さらに，「アルコール中毒者匿名会（A. A. meetings)」や刑務所の監房や庭で採取した録音テープの資料から，「累犯(Recidivism)」こそ我々の社会における疎外の特筆すべき例証であると結論づける。そして，犯罪こそ今日最も繰り返されるテーマであり，「法の執行者である我々」の主要な目的は，いかなる手段を用いてもそれを撲滅することであると主張する。Jones は Carpentir が盗聴者であり，しかもその仕事を平然と行っていることに衝撃を受ける。なぜなら，国の中で最も警察の犠牲者になっているのは黒人であり，彼の行為は民族にとって背信行為以外のなにものでもないからである。だが，民族意識や倫理感でもって，また，「芸術の目的は人間の価値を発見したり，それに目覚めたり，それを探り出すことである」といった一般論でもってしか対抗できない Jones の言葉は，虚しく響くばかりである。

Carpentier が，彼の芸術の概念は「電子の盗聴装置で科学的に盗み聞きし，人が達成したいと願ういかなる写実的な物語の創作にも対応する現実の証拠を手に入れる」ことであり，「芸術的な技術者の非凡で創造的な才能は，社会心理学者のケーススタディーと社会的経済的に抑圧された地域に住む人々の日々の体験とを結びつける」と語るに及んで，Jones は愕然とする。Carpentier は人間の感情を持ち合わせていない，まさに科学技術によって洗脳された人間ロボット（「電子ニガー (Electronic Nigger)」に他ならない。そして，以下の会話によって Jones の敗北は決定的なものとなる。

Mr. Jones

Does not the writer have some type of obligation to remove some of the intellectual as well as political, moral, and social tyranny that infects this culture? What does all the large words in creation serve you, my Black brother, if you are a complete whitewashed man?

Mr. Carpentier

Sir, I'm not black nor your brother... There is a school of thought that is diametrically opposed to you and your black chauvinism... You preach bigotry, black nationalism and fascism! ... The idea... black brother... intellectual barbarism! ... Your statements shoud be reported to the school board—as well as your permitting smoking in your classroom.[3)]

その時，Cartentier に向かって「アンクル・トム」という言葉を投げつけたのは，白人学生，Sue であり，それは自分の言う台詞だと言い返したのが黒人学生 Bill であったのは，ブリンズの皮肉なユーモアである。やがて，Cartentier が自分の家族の遺体安置所で彼が隠しマイクを取りつけた時に観察した青年期の死体愛について語り始めると，学生たちはうっとりとしてそれに聞き入るようになっていく。Jones はヘミングウェイやホイットマンといったアメリカ文学の作家たち，そして，かつての黒人指導者，ブッカー・T・ワシントンまで持ち出して彼に対抗し，彼らを自分のほうに引きつけようとするが，ことごとく無視される。ついに彼はこのクラスの解散を告げるのだが，このことすら学生たちは気づかない。なぜなら，彼らは Cartentier に圧倒されてしまっているからである。徐々に訳の分からない抽象的な名詞の羅列に変わっていく Cartentier のレトリック，あまりの不快感に吐き気をもよおし身をよじりながら Jones が発する途切れがちな言葉。この 2 人の台詞が同時進行する陳腐なシーンはクライマックスの訪づれであり，そこにブリンズの一切のメッセージが込められているようである。やがて Sue と Bill が連れ立って退場す

ると，Jones も黒人学生 Martha に介護され退場していく。残った学生たちはすべて白人であり，彼らは Carpentier の回りを取り巻き，彼の究極のレトリック（「言語の記号化」）を会得する。（黒人の "agent" に群がるのは常に白人であるということの暗示。）そして，彼らは死のシンボル，烏の鳴き声を大声で叫びながら退場して行き，舞台が暗転する。

さて，*The Electronic Nigger* は黒人社会を取り巻く複雑な状況のなかで翻弄される人物を描いた作品であるが，その中に込められている作者のメッセージを考察してみたい。先ず第一点は，この作品は 2 人の黒人指導者，W・E・B・デュボイスとブッカー・T・ワシントンの歴史的な論争をブリンズ特有の巧妙な手法で再演させたものであるという点である。膚の色の薄い「丁寧な言葉づかいをする」Jones はデュボイスを，Carpentier はワシントンを連想させる。Carpentier という名はフランス風であり，彼は時折気取ってフランス語を交えてしゃべる。だが，彼は前述の引用文に示されているように "A. T. Carpentier is the name ... notice the silent T ..." と自己紹介し，" t " の文字は発音しないことを強調する。その名前から想起されるのは "carpenter（大工）" という職業名であり，それはワシントンの起こしたタスキーギ運動を象徴している。手に職をつけ白人社会に受け入れてもらうことを目指した彼の運動は結局は白人による黒人労働者階級の搾取に加担するものであったとし，彼を「アンクル・トム」と見做す人々には，この作品の登場人物，最新の科学技術を駆使する Carpentier は現代の「アンクル・トム」であることは容易に想像がつく。彼は黒人コミュニティーの中に身を置きながら，体制のスパイとして公然となんら良心の呵責もなく裏切り行為を行うことができる。黒人社会に蔓延する犯罪や病理は白人社会にとって脅威である。従って，彼らは合法的に黒人を管理し支配する有効な手段として黒人の「スパイ (agent)」（Carpentier は自らを "we agency" と呼ぶ）を送り込む。

ナイアガラ運動に象徴されるデュボイスの運動は，職業教育を目的としたワシントンのそれとは違い，黒人の文化と学問の領域を主眼に置いた。だが，彼はその中で生まれた知識人からなる黒人中産階級が体制に組みこまれてしまう

という苦い体験をする。この黒人知識層の持つ脆さをブリンズは Jones の中に投影している。感情に動かされない冷静さを持ちあわせ，知性と芸術が何らかの特権をもたらす世界で自分を正当化しようとする若い芸術家，Jones は，声高な物言いでもって捲くし立て，人を支配しようとする Carpentier のような人間の前にあっては無力な存在でしかない。Jones の武器は使い古された人道主義を振りかざしたり，古典から現代にいたる白人作家に関する知識をひけらかすことでしかなく，彼の知性や芸術は抽象論の域を出ない。従って彼もまた白人文化に洗脳された現代の「アンクル・トム」に他ならないのである。

ブリンズは Jones と Carpentier を通して同化した黒人の二つのタイプを描いた。Carpentier，即ち Electronic Nigger はブリンズが創造した究極の同化した黒人像である。この人物の持つ非人間性と非現実性はブリンズ特有の風刺であることはいうまでもない。たが，彼の主眼はこのユニークな人物を創造することよりも，人々がこの陳腐な人物の本質を見抜けず，彼の空虚な言葉に魅せられ，次第にその言語に支配されて行くプロセスの危険性を描くことにあるように思える。ブリンズは他の作品にも見られるように，常に声高にレトリックを駆使し，威圧し，黒人大衆を盲目にするコミュニティーの指導者たちに批判の目を向ける。そして，彼はその結果どういう事態が生じるのかという疑問を投げ掛ける。レスリー・サンダーズはこうした指導者たちを，彼らは「原型的な黒人の説教師のように，支配力の源を言語の中に見出している」と批判したうえで，「この戯曲は1960年代の教室を越えて，根本的に違った言語と形式で続行されることになる黒人芸術と黒人芸術家に関する激しい議論を引き起こした」と記している[4)]。

サンダーズはまた次のようにも指摘する。「Carpentier が擁護する種類の芸術，コミュニティーの立ち聞きは，ブリンズを含めた黒人体験を描く戯曲家たちの現実を写し出している」と。Carpentier は盗聴器を埋め込んだどんな場所からも自己の作品の「偉大なるテーマ」を見出す。孤独，離間，疎外と吟唱する彼の姿は，「黒人体験」を志向する芸術家が安易に自らのテーマと，道具としての言語を乱用することにともなう空虚さと危険を，斜に構えた視点から

告発しているようだ。同時に，この告発はブリンズが自らに課したテーマであると言えなくもない。

(3)

A Son, Come Home は黒人家族の歴史を繊細なタッチで描いた寸劇である。登場人物は MOTHER（50代前半の女性，名前は Bernice），と SON（30才の男性，名前は Michael），そして，THE GIRL と THE BOY の 4 人。後者の 2 人は黒いシャツとタイツを身に付けていて，MOTHER と SON の心に生じる気分や緊張感を表現する。この 2 人はまた MOTHER と SON の記憶と歴史を蘇らせる様々な人物に化身する。登場人物はすべて黒人である。

この作品は楽しいはずの再会が母と子に決定的な別離をもたらしてしまった悲劇を描いたものである。9 年間の空白の後，息子が母親を尋ねてくる。母親は世俗の生活を捨てて宗教に凝り，厳格な規律を重んじる教会が経営するホームに住んでいる。母親は息子の来訪を心待ちにし，出会った 2 人はなんとかして空白の時間を埋めようとする。だが，彼らの会話はとりとめなく，また食い違っていて，互いの痛ましい記憶を呼び起こすばかりである。結局，母親は再び宗教的な環境の中に引き篭もり，息子は自分の生活へ戻っていくのである。

ブリンズは親子の再会という人生のひとこまを切り取り，その束の間の出会いの中に込められたそれぞれの期待や失望，そして，絶ちがたい肉親の情や葛藤を繊細なタッチで描いていく。この芝居は母親が久し振りに出会った息子に濃やかな愛情を示すごくありふれた光景から始まる。だが，2 人の会話が進むにつれ，彼らの共有する過去がそれぞれの心の中に違った出来事や思い出として記憶されていることが明らかになっていく。母親が求めているのは家族の絆であり，そのことは彼女が Michael に唯一の肉親である彼女の姉の Sophie に連絡をとらないことを責め，繰り返し彼女と連絡を取るように説得することで示される。だが，Michael には母には言えないが，ほんとうに困ったときに Sophie に見捨てられた苦い記憶が生々しく蘇るだけである。この回想シーン

は二人の会話の合間に THE BOY と THE GIRL によって巧みに演じられる。やがて母親は，フィラデルフィアの「底 (The Bottom)」と人々が呼ぶ酷い地域で Michael の父親と出会ったことや彼を身篭もった時の喜びを楽しげに語り始める。彼女の心の中には，Sophie に結婚しないで子供を産むことに反対されても Michael の父親を心から愛していると言い切った時の自分の姿が鮮やかに蘇る。だが，彼女の幸せな思い出は，父親には滅多に会うことがなかったという Michael の一言によって破られる。そのことで，(彼が生まれてから数年後，3人が偶然バスの中で出会うのだが) 彼女には父親らしさをにじませた Michael の父親を固くなに拒絶した辛い思い出が蘇ってくる。

MOTHER

You never gave him no name... his name is Brown... Brown. The same as mine... and my daddy... you never gave him nothing... and you're dead... go away and get buried.

BOY

You know that trouble I'm in... I got a wife down there, Bernie. I don't care about her... What could I do?[5)]

BOY と MOTHER によって演じられるこの悲しい別れの場面も決して Michael に告げられることはなく，2人の会話は少年になったころの Michael の思い出へと移っていく。彼はそのころ母親が一緒に暮らしていた男，Will の消息を尋ねる。彼の質問をとおして，母親は10年間その男と暮らしたが，彼が決して彼女と結婚することはなかったのは，彼が余所に家庭を持っていて離婚する意志がなかったことが明かされる。Will の思い出は Michael には懐かしいものであるが，母親には辛いものでしかない。Will はたった一人の父親のような存在だったと告げる Michael に，母親は自分たちを引き裂いたのは Michael 自身であったことを思い起こさせる。少年になった Michael は母親を

他の男に取られてしまうことを恐れたのである。彼はそのことを弁明しようとするが，２人の間には重苦しい沈黙が流れる。そして彼らはまたとりとめのない会話を交わし始める。だが，２人の会話は食事の時間を告げ，母親を急きたてる Sister の出現によって中断される。こうして束の間の再会は２人の心に満たされぬ思いを残したまま終わりをつげるのである。母親は再び宗教の世界へと引き籠っていき，息子は自分の世界へと戻っていく。

A Son, Come Home は互いに強く求めあいながらも歩みよることのできない親子の微妙で複雑な心理を，入念に計算された幕間劇を挿入することによってうまく表現している。だが，この作品は巧みな心理劇であると同時に，多くの黒人家族がたどってきた歴史にも言及している。"The Chain Gang"（一つの鎖で繋がれ野外で強制労働をさせられる囚人のこと）であった Michael の父親は，その苦しさから逃れるべく南部の家族を見捨て，北部に逃亡して来た。Will は自分の家族を捨て，Michael の母親と同棲していた。そして，Michael 親子の家庭も父親不在であるが，その母親にも両親の存在は見えてこない。いずれの人物からも見えてくるのは，家族の離散とそれによって生じる癒しがたい孤独である。Michael の母親は自分の家族が欲しいがゆえに彼を産んだ。だが，その彼によって彼女はかけがえのない Will を失うことになる。黒人演劇の研究家，Geneviéve Fabre も指摘しているように，黒人体験を扱った戯曲では繰り返される移住，出発，帰宅，そして出会いと別れが描かれる[6)]。ブリンズのこの作品もその例外ではない。だが，彼はその中で自分の人生を受け入れ，悲しみを秘めながらも忍耐づよく生きていく人々に温かい目を注いでいるようだ。

Notes:

1) Leslie Sanders, "Ed Bullins." Edited by Thadious M. Davis and Trudier Harris, *Afro-American Writers after* 1955: *Dramatists and Prose Writers* (Gale Research Company, Detroit, 1985), p. 45.

2) Ed Bullins, *Electronic Nigger.* Ed Bullins, *Five Plays by Ed Bullins* (The Bobbs-Merill Company, Indianapolis, 1969), p. 222.

3) Ibid., p. 239.

4) Leslie Catharine Sanders, *The Development of Black Theatre in America*

(Louisiana State University Press, Boston, 1988), p. 202.

5) Ed Bullins, *A Son, Come Home. Five Plays by Ed Bullins*, p. 202.

6) Geneviéve Fabre, *Drumbeats, Masks, and Metaphor* (Harverd University Press, Cambridge, 1983), p. 111.